

Title	ワーグナーにおける反ユダヤ主義
Author(s)	伊藤, 嘉啓
Editor(s)	
Citation	独仏文学. 1981, 15, p.1-19
Issue Date	1981-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/10226">http://hdl.handle.net/10466/10226</a>
Rights	

# ワーグナーにおける反ユダヤ主義

伊藤 嘉 啓

## (1)

ワーグナーにおける反ユダヤ主義といへばワーグナーとヒトラー、あるひはワーグナーとナチスといふくみあはせをかながへるのがふつうであらう。

たしかにヒトラーはワーグナーがすきだつた。ナチスの宣伝相ゲッベルスのいふところによれば、ヒトラーはワーグナーのあいこくてきオペラ『ニュルンベルクのマイスタージンガー』を100くわい以上みてゐるさうである。

1933ねん3月21日、ベルリンのこくりつ歌劇場で、第3帝国発足の祝賀演奏会がもよほされた。だしものは、フルトヴェングラーしきによる『マイスタージンガー』であつた。ワーグナーはナチスの公的な芸術シンボルとなつたのである。

ヒトラーはパイロイト音楽祭にけいざい援助をあたへ、みづからもしばしばパイロイトをおとづれた。いまでも、ヒトラーをむかへてゐるウィニフレッツの写真、ヒトラーとうでをくんでゐるウィーラントやウォルフガング兄弟（ジークフリートとウィニフレッツのこども、すなはちワーグナーのまご）の写真などが、かすおほくのこつてゐる。

そのころ、ウィニフレッツは、はや死にした夫ジークフリートのあとをうけて、パイロイト音楽祭の主催者であつた。ウィニフレッツは4にんの子もちながら、ジークフリートとは28もとしがちがつてゐたので、まだ30だいなかばの未亡人であつたから、ウィニフレッツとヒトラーとは、ちかいうちに結婚するのではないかといふうはさがながれた。

第3帝国時代、パイロイトは、いはユダヤの聖地となり、夏におこなはれるパイロイト音楽祭のきかんと、ナチスの幹部はすべてパイロイトにあつ

まるので、パイロイトがりんじ首都の観さへあつた。

ナチスは映画や音楽のやうに直接大衆にうつたへかけるものが、いかにおほきなせんでん効果をもつてゐるかを、よくしつてゐたから、聖地パイロイトに多数の兵士や労働者を「総統の招待客」といつてまねくことも、わすれなかつた。人々はこゝで「洗脳」されてかへつたのである。

ヒトラーはワグナーをこのみ、ナチスはワグナーを利用したが、それがワグナーそのひとゞ一体なんの関係があるのだらうか。ワグナーは1883ねんに死に、ナチスが抬頭してくるのは、1920ねんだいになつてからである。ワグナーはナチスに利用されたゞけであり、ワグナーにはなんのつみもないのだ、ともみられる。はたしてさうなのかどうか。

## (2)

ワグナーにはナチスと共通するいくつかのものを、さぐることができる。まづだい1に、ワグナーの国粹的たいどである。ワグナーはのちの『マイスタージンガー』(1868ねん)ではじめて、「たとひ神聖ローマ帝国は雲散霧消しようとも、さいごにこの手にのこるもの、それは神聖なドイツの芸術だ」(だい3まく、だい5ば)といふやうに「あいこくてき」になつたのではなく、それよりもずつとはやく、1843ねんの『自伝のスケッチ』に、「モーツァルトの作品のうちでは、『魔笛』の序曲だけがすきだつた。『ドン・ジョバンニ』はイタリア語の歌詞がついてゐるので、いやだつた」と、いひ、「こんにちのイタリア人の弛緩した無節操や、ちかごろのフランス人の輕佻浮薄さは、まじめで、せいじつなドイツ人に、競争あひてであるかれらがうまくえらんで、そだてた手段をうばひかへして、真の芸術作品の創作において、だんぜんかれらをしのぐやうにと、ドイツ人をそゝのかしてゐるやうに、わたしにはおもはれた」と、かいてゐる。

ワグナーのナショナリズムは、当時の時代思潮のなかでみると、なにもとくべつにめづらしい立場ではない。ヨーロッパのナショナリズムは、ふ

つうナポレオンの遺産だとされてゐる。ドイツでもナポレオンの占領下で、みんなぞくてき自覚が急速にたかまつた。哲学者フィヒテが、あの有名な「ドイツ国民につぐ」を講演して、ドイツの民族意識をかきたてたのも、そのころであつた（1807—8ねん）。アルニムとブレンターノが、ドイツの民謡をあつめて、『少年の魔法の角笛』と題して出版したのが、1806ねんから8ねんにかけてあり、その刺戟をうけて、グリム兄弟が民話の蒐集にのりだし、『子供と家庭のための童話』のだい1くわんがでたのが1812ねん、だい3くわんがでたのが1822ねんである。おなじくグリムの『ドイツの伝説』が1816ねんから18ねん、歴大な『ドイツ語辞典』のだい1分冊がでたのが、1852ねんである。

ワーグナーは1813ねんのうまれであり、その青年時代はドイツがフランスやイギリスにくらべて、政治てきにも、文化てきにも、おくれをとつてゐた時期にあたる。ドイツが近代国家に統一されるのは、きはめておそく1871ねんである。文化てきにも、ゲーテ、シラーはすでにでてゐたものゝ、まだまだ後進国とみられてゐた。たとへば、ドイツのオペラ界では、フランスやイタリアのオペラが主流であり、自国ドイツのオペラは、フランス・オペラやイタリア・オペラの上演のあひまあひまに、いつてみれば、「おなさけ」でいれてもらつてゐるにすぎなかつたのである（ワーグナー『自伝のスケッチ』）。このやうな逆境のなかでこそ、愛国主義はもえあがる。ワーグナーのナショナリズムは、なにも孤立した、特異なものではなく、当時の1つの思潮の影響のもとにあるといへる。（たゞし、ワーグナーのナショナリズムについては、こゝではあまりちいらない。）

### (3)

ナショナリズムは、一種の排他主義でもある。ドイツのナショナリズムは、反フランス、反イタリア的とどうじに、もう一方において、ひつぜん的に国内の異分子、すなはち、ユダヤ人にむけられ、反ユダヤとなつてあらはれ

る。17世紀のすゑ、ウィーンから追放されたユダヤ人がドイツに移住して  
いご、ドイツには大勢のユダヤ人がすむやうになつてゐたからである。ねつれ  
つな愛国主義者フィヒテが、反ユダヤであつたのも、当然の帰結といへよ  
う。ワグナーのばあひもまた、同様であつた。ナショナリスト・ワグナ  
ーは、反ユダヤ的感情のもちぬしでもあつたのである。ワグナーとナチス  
とに共通するものゝだい2は、これが本稿の中心となるのであるが、それは  
反ユダヤ主義である。

ヨーロッパ社会において、ユダヤ人がきらはれ、差別された歴史はふる  
い。それはとほく、ローマ時代にまでさかのぼる。すでに、ローマ時代にお  
いて、ユダヤ人は国家の官職からしめだされてをり、1179ねんには、ユダヤ  
人とキリスト教徒の居住地をわけ、ゲットーのやうなものまではじまつてゐ  
るし、1215ねんのだい4くわいラテラン宗教会議では、ユダヤ人はすべてユ  
ダヤ人徽章をつけるようにきめられ、ナチス時代の星型のユダヤ・マークの  
原点までみられる。

中世時代に、ユダヤ人がいかにきらはれたかの1つのれい。1350ねん、ベ  
ストが大流行したをり、ユダヤ人が井戸に毒物をなげこんでまはるのが、病  
気のげんいんであるとのデマがとんだが、これは民衆の根づよい反ユダヤ感  
情を端てきに、しめしてゐる。

シェクスピアのあの『ヴェニスの商人』は1597ねんの作である。げんじつ  
には、シャイロックのやうなユダヤ人はひとりもゐなかつたかもしれないが、  
シャイロックのいやらしさは、そのころの大衆のおもひゑがいてゐたユダヤ  
人像そのものなのである。さいごには、ポーシャの機転で、それまで優勢だ  
つたシャイロックのたちばは、一転して劣勢にかはる。その「どんでんかへ  
し」に、観衆はわつとわいたのである。

文芸作品はそのときどきの時代思潮をもつともよく反映してゐる。つだ・  
さうきちが日本思想史の研究に、『文学にあらはれたる国民思想の研究』と  
いふ題をあたへた理由もそこにあるであらう。文芸作品はげんそくとして虚  
構のうへになりたつ。それは、つくりごとであり、かんたんにいへば、うそ

である。しかし、つくりばなしであり、うそでかためてみるところにこそ、文芸の価値がある。うそだからこそ、ほんたうなのである。それは逆説では決してない。事実は信じられない。ことがらが普遍性をかくとくするために、うそは必須条件である。要するに、文芸作品は、うそだから、信じられるのである。

その信頼できる文芸作品からもう1つのれいをあげる。1749ねん、レッシングは『ユダヤ人』(*Die Juden*)といふ喜劇をかいてゐる。ある男爵が旅の途中で、おひはぎにあふが、をりよくとほりかゝつた旅人にたすけられた。おひはぎは、服装からしていかにもユダヤ人らしい。しかし、だんだん話がすゝむにしたがひ、事件の内容がしだいに、あばかれる。ユダヤ人とおもはれたおひはぎは、じつはユダヤ人ではなく、ユダヤ人らしくみせかけて、おひはぎをしたのであり、男爵の難儀をすくつてくれた、せいじつな旅人こそユダヤ人であつた。男爵とおひはぎのもつてゐるユダヤ人にたいする偏見は、すなはち、観客のもつてゐる偏見であり、レッシングはこゝで、いかにも啓蒙家らしく、この「おろかな」偏見を、わらひものにして、それを人々のこゝろのなかゝらとりのぞかうとしてゐる。しかし、レッシングがこのやうな戯曲をかゝねばならなかつたといふところに、そのころの大衆の反ユダヤ感情のつよさが、よみとれる。ユダヤ人にたいするそのやうな偏見が、当時の社会にひろくゆきわたつてゐたから、レッシングはかういふ戯曲をかいて、啓蒙しなければならなかつたのである。

以上2つの戯曲は、一方がユダヤ人を悪役として登場させ、他方はユダヤ人を善玉にゑがくことによつて、ともにどちらも、16世紀すゑと18世紀なかばの民衆のユダヤ人にたいする嫌悪をものがたつてゐる。

#### (4)

ワーグナーの時代、19世紀では、どうなのか。年表でみると、1819ねん、ワーグナーは6才であるが、このとし、「ヘップ・ヘップ」騒動といふのが、

全ドイツにまんえんしてゐる。「ヘップ・ヘップ」とは、「イエルサレムは、ほろぼされた」といふいみの略語で、十字軍じだいからの反ユダヤ標語である。ユダヤ人街が襲撃され、ユダヤ教会であるシナゴークが、つぎつぎとやきうちにあひ、軍隊がでてやうやくおさまつたほどであつた。(山下肇『近代ドイツ・ユダヤ精神史研究』)

そのほかにも、反ユダヤ運動はかすおほくみられるが、そのうちから、おもなものをひろへば、1870ねんだいにはひると、普仏戦争ごの未曾有の経済繁栄は、たゞ資本家だけをうるほしたにすぎず、大都市に集中した労働者たちは、物価だかと住宅難にくるしみ、ストライキがつゞいたのであるが、そのやうな不安な状況を反映して、反ユダヤ宣伝がひろがり、あらたに、それまでの反ユダヤ感情に人種的偏見までくはゝつてきてゐる。

人種的反ユダヤは、フランスのゴビノー伯爵の著書『人種不平等論』(J. A. Gobineau, *Essai sur l'inégalité des races humaines*)にゆらゐる。このほんは、1853ねんから56ねんに出版されたものであるが、ながいあひだ黙殺されてゐたのに、出版から20ねんもたつた70ねんだいになつてから、急に世の注目をひくやうになつたのである。ゴビノーはこゝで、世界の文化は白人によつてつくられたものであり、白人は黒人や黄色人をしはいする使命がある、といつてゐる。これが、それまでのユダヤ人にたいする反感にまじりあつて、人種的反ユダヤとなつたのである。

ユダヤ人にたいする偏見は、通常3つに大別できる。まづローマ時代は、キリスト教からみて異教であることからくる宗教的偏見、つぎに、中世になると、ユダヤ人、すなはち、かねかしといふイメージが定着する。ユダヤ人にかねかし業者がおほかつたからである。なぜ、ユダヤ人にかねかしがおほかつたか。キリスト教徒は利子をとることを禁じられてゐたからである。『ルカ伝』6—35には、「汝らは仇を愛し、善をなし、何をも求めずして貸せ、然らば、その報は大ならん」とあり、中世最大の神学者トマス・アキナスもまた、その『神学大全』のなかに、なぜ利子がいけないかを、かいてゐる。しかし、経済の発達は、いや応なしに、金融業を必要としたので、ユダヤ人

のみに利子の取得をゆるし、かねかし業をおしつけたのである。

ほんらい、利子を禁じてゐたのは、ユダヤ教であつた。「汝とともにあるわが民の貧しき者に金を貸す時は金貨のごとくすべからず又これより利足をとるべからず」(『出エジプト記』22—25)。なほ、このほかにも2、3ヶ所旧約聖書には、利子を禁じてゐることばがある。キリスト教はユダヤ教の1分派であるから、ユダヤ教のこの利子禁止がキリスト教に移行したのであるが、本末顛倒してしまひ、キリスト教徒によつて、ユダヤ人が、かねかし業を強制されるしまつとなつたのである。

ユダヤ人はなにもすきこのんで、かねかしになつたわけではない。かねかし業は社会にとつて必要悪だつたのであり、その損なやくめをユダヤ人はキリスト教徒からおしつけられ、やむなくさうならざるをえなかつたにもかゝらず、あげくのはてに、ユダヤ人はキリスト者から、経済的うらみをかひ、悪徳商人、かねの亡者とのゝしられる結果となつた。かうして、中世にはひると、ユダヤ人は宗教的偏見にくはへて、経済的のろひまで、になはねばならなくなつたのである。

19世紀後半になると、まへにいつたやうに、さらに人種的偏見がでてきて、ユダヤ人は3重の意味で、きはれるやうになつた。「反ユダヤ主義」(Anti-semitismus)といふことばがあるが、このことばは、1879ねん、ウィルヘルム・マル(Wilhelm Marr)と名のるをところが反ユダヤ・パンフレットに使用したのにはじまる、といはれてをり、このやうな新語がつくられるところに、19世紀ドイツの反ユダヤ運動のつよさとひろがり、はつきりとあらはれてゐる。つゞいて、1880ねんから81ねんには、ワーグナーでいへば、83ねんの70才の死にちかい最晩年であるが、このとし、ニーチェの妹の夫ベルンハルト・フェルスター(B. Förster)がユダヤ人排除の請願書を、ピスマルクあてにおくつてゐる。ドイツにおけるユダヤ人の害毒をとき、裁判官、教師の職からのユダヤ人のしめだしを要求したところのこの請願書には、じつに265,000名もが署名したのである。

もちろん、ユダヤ人をきらつたのは、ひとりドイツだけではない。シェク



スピアの『ヴェニスの商人』からもわかるやうに、エリザベス朝のイギリスがさうであつたし、ワーグナーの死後まもなくの1894ねんには、フランスにドレフェス事件がおこつてゐる。大仏次郎の小説でも有名な事件であるが、ユダヤ人将校ドレフェスが、スパイの容疑で無期懲役となり、軍部や反ユダヤ的右翼陣営はこの刑をしちしたが、作家のゾラなどが抗議し、つひに、その無実があきらかとなつた。そのころ、フランスは普仏戦争にやぶれたためにドイツに割譲したアルサス・ローヌ地方の奪還をはかつて、ナショナリズムがさかんな時期であり、ナショナリズムと反ユダヤとの1つの相関々係をしめしてゐる。

## (5)

ワーグナーは1849ねんのドレスデン暴動にさんかしたために、スイスのチューリヒに亡命、そこで49ねんから51ねんにかけて、『芸術と革命』『未来の芸術作品』『オペラとドラマ』などのワーグナーのおもな論説のだいぶんをかいてゐるのであるが、1850ねんに雑誌「音楽新誌」(Neue Zeitschrift für Musik)に匿名で発表した1篇『音楽におけるユダヤ性』、それは9ぐわつ3日、6日にけいさいされ、のち1861ねんに「音楽におけるユダヤ性の解説」といふ序文をつけて、こんどは実名で出版されたのであるが、この論説がワーグナーのために、いかにおほくの敵をつくつたかは、はかりしれないものがあるところの問題の文章である。いご「音楽におけるユダヤ性の著者」といふことばは、ワーグナーの代名詞とさへなつたのである。

ユダヤ人はじぶんのことばをもたず、ままたまそこにすんでゐる国のことばを、先天的にではなく、習得されたものとして、つかつてゐるにすぎない。ユダヤ人は言語や芸術の領域では、丁度とりの鸚鵡のやうに、口まねし(nachsprechen)、もはう(nachkünsteln)してゐるだけであり、真に詩作し、芸術作品をつくりだすことはできない。芸術とは、ほんらい、心情の吐露であるはずなのに、教育あるユダヤ人にとつて、芸術は1つのかざり、み

えとなつてゐる。近代の芸術はユダヤ人によつて、墮落してしまひ、奢侈品、ぜいたく品となつた、芸術のユダヤ化 (Verjudung der Kunst) である。

このやうに、ワーグナーの反ユダヤ論は、ゴピノーにさきだつてすでに人種的である。ゴピノーの著書が出版されたのは、これから2ねんごの1852ねんであり、その影響のもとに本格的な人種的反ユダヤ主義が世のなかにでてくるのは、さらに20ねんのちの1870ねんだいになつてからである。

それでは、なぜ、ワーグナーはかくもユダヤ人をきらふのか、おほくの研究書は、ワーグナーと特定のユダヤ人との個人的ままつを、その理由にあげてゐる。たとへば、『音楽におけるユダヤ性』に名まへのでてゐるメンデルスゾーンに、ワーグナーは終生不快な感情をいだいてゐたらしい。

1835ねん5ぐわつ、22才で、まだうだつのあがらないワーグナーは、4つとしようへで、そのときすでにワーグナーの故郷ライプツィヒのゲワントハウス・オーケストラのしき者のちゐらについてゐたメンデルスゾーンにあてゝ、「ハ長調交響曲」(C-dur-Symphonie)をおくつたが、メンデルスゾーンは、これを完全にもくさつしたのである。

『音楽におけるユダヤ性』にマイヤーベアの名まへは直接はでてゐないが、この論説は、もつばらマイヤーベアにむけられたものである、といはれる。マイヤーベアとワーグナーとの関係は、メンデルスゾーンとのそれよりも、一そうふかい。1839ねん8月、ワーグナーはバルト海ぞひのまち、リガからロンドンをへて、パリにむかふ途中、大陸のドーヴァ海峡にめんした港町、ブローニュ・シュル・メールに4週かん逗留し、そのをりに、ベルリン出身のせんばいで、そのころフランス・オペラ界でも名のしられたマイヤーベアとしりあひとなつた。マイヤーベアは、しんせつにもパリでの援助をやくそくしてくれたので、ワーグナーはなんとかじぶんのオペラを一流劇場で上演できるようにと、再三再四たのみこみ、マイヤーベアもいろいろと手をうつてくれたのであるが、結果はなに1つうまくゆかず、ことごとく失敗にはつた。ワーグナーはしだいにマイヤーベアの「好意」に疑問をもつやうになり、1841ねんのシューマンあてのてがみでは、マイヤー

ペーアのことを「いかさま師」(Betrüger)とよんでゐるし、後年(1865ねん)の『わが生涯』のなかでは、1839ねん、マイヤーペーアに紹介してもらつたところのパリのルネサンス劇場が、ワーグナーのオペラ上演直前に倒産したのは、たんなる偶然ではないかのごとく書いてゐる。

マイヤーペーアの側にも、そのうちに、あからさまではなかつたけれども、ワーグナーをさけるやうなそぶりもみられた。1847ねん、ベルリンで出会つたときには、マイヤーペーアは、あすにも、旅行にでかけるやうなことをいつてゐたので、ワーグナーはてつきりもう出発したものとおもつてゐたところ、ずつとベルリンにとゞまつてゐたことがあとになつてわかつたし、1849ねん6ぐわつ、暴動に加はつたために、国外に逃げさねばならなかつたワーグナーは、スイスから、パリにはひつたのであるが、そこにゐたマイヤーペーアは、公開逮捕状がでてゐる亡命者ワーグナーとあまり接触をもちたくないやうであつた。47ねんのベルリンでの、そして、49ねんのパリでのマイヤーペーアの応待、ともにワーグナーには、こゝろよからざる記憶としてのこつた。

ワーグナーの反ユダヤ感情は、以上のやうな、とくていのユダヤ人にたいするワーグナーの個人的たいげんにもとづいてをり、さらにまた、ワーグナーのちゝおやの死ご、まもなく、はゝおやが再婚したあひでのルートウィヒ・ガイヤー(Ludwig Geyer)、この継父ガイヤーこそワーグナーのじつちゝおやだつたのではないか、などいふ人もあつて、はなしは大へんやゝこしくなるのであるが、とにかくにも名目上はあくまでも継父であるガイヤーがユダヤ系であつたことが、ワーグナーのユダヤざらひのもとになつてゐる、といふ意見もある。それは、ワーグナーじしん、ひそかにガイヤーをじつちゝとみとめ、ユダヤの血がじぶんのなかにながれてゐることの認識が劣等感となり、逆にユダヤへの反撥となつた、とかんがへるのである。

はたして、ワーグナーの反ユダヤ感情は、さうした個人的たいげんや経歴からきてゐるのであらうか。ワーグナーは個人的には、大勢のユダヤ人ときあひがある。たとへば、ハイネとの関係。ワーグナーはハイネの才能をた

かく評価してをり、ワーグナーの散文には、ハイネからの影響がつよい、といはれてゐる。ワーグナーのオペラは、ハイネから2つの素材をとり（『さまよへるオランダ人』と『タンホイザー』）、ハイネの詩「2人の擲弾兵」には、シューマンとならんで、ワーグナーも作曲してゐる。ワーグナーとハイネとの交渉は、作品のうへだけにとゞまらない。2人はパリであひ、直接に対話までもつてゐる。パリに亡命中のハイネは、祖国ドイツで作品は発禁となり、そのうへ、かつての仲間ルートヴィヒ・ベルネの屍にむちうつた『ベルネ覚書』のためにスキャンダルをひきおこし、一せい攻撃をあびてをつたとき、ワーグナーはハイネを弁護する一文を「夕刊ドレスデン」紙にのせてゐる（1841ねん8月4日）。

しかし、ワーグナーのハイネにかんする発言は、じかんとゞもに微妙にはつていつた。このてんにかんしては、リヒターの『とりけしと否定』（Karl Richter, *Absage und Verleugnung*）にくはしい。1850ねんの『音楽におけるユダヤ性』のなかでは、ハイネもまたユダヤ人芸術家として、ひなんされてゐる。

ワーグナーは晩年になつて、個人的にユダヤ人ぎらひになつていつたのか。1881ねん、ワーグナーは68才であり、83ねんの死にさきだつわづか2ねんまへであるが、6ぐわつ28日、ワーグナーは1通の無署名のてがみをうけとつた。それは、ユダヤ人しき者ヘルマン・レーヴィ（Hermann Levi）を中傷するてがみであつた。レーヴィはワーグナーのつまこじまと通じてゐる。あのやうなユダヤ人に、ワーグナーの作品を指揮させてはならない。作品はけがれてしまふ、といふやうな内容であつた。1882ねん7月26日、パイロイト祝祭劇場で、『パルジファル』が初演されたのであるが、その指揮をしたのは、ほかでもないこのレーヴィであつた。レーヴィに『パルジファル』のしきを依頼したのは、ワーグナーの意思であり、ワーグナーが決定したのであつた。『パルジファル』のしきの3ヶ月まへ、4ぐわつ13日、レーヴィはちゞおやにあてたてがみに、「ワーグナーは最善最高の方です。世間はワーグナーを誤解し、とやかくいつてをりますが、よの中はいつでも傑出し

たものを、ねたむのです」とかいてゐる。

ワグナーはたしかに反ユダヤ感情をもつてゐた。アドルノ (Theodor W. Adorno) などは、「ワグナーの反ユダヤ主義のなかには、のちの反ユダヤのあらゆる徴候がふくまれてゐる」と、いつてゐるほどである。それと、ワグナーとユダヤ人との交友は、一たい、どのやうに並存するのであろうか。あるひは、並存ではなく、ハイネのばあひにみられたごとく、ワグナーの意識のなかでは、ユダヤ人にたいする態度全般が、「とりけし」から「否定」へとかはつていつたのであろうか。レーヴィのれいもあるし、どうもさういひきることもしかないやうにおもはれる。

## (6)

ワグナーの反ユダヤは、とくていのユダヤ人との直接の接触によるといふよりは、むしろ、当時の社会、そのころの時代思潮からの影響とかがへる方が、よりすくなくまぢがつてゐるかもしれないやうにもおもはれる。

すでにみたとおり、ワグナーの時代、すなはち、19世紀は、反ユダヤ感情が社会ぜんたいに、ひろく、ふかく滲透してゐた時代である。ユダヤ人排撃の歴史はふるく、19世紀が、ほかの時代とくらべて、とくに反ユダヤ的とは一概にいへない面もある。それどころか、逆に、18世紀すゑから19世紀にかけては、ユダヤ人がゲッターと法の差別から解放された時代でもあつた。1782ねんには、オーストリアのヨーゼフ 2世がユダヤ人に市民権をみとめる寛容勅令を公布、1791ねんには、革命ごのフランスがユダヤ制限全廃、1796ねんには、オランダのユダヤ人解放、19世紀にはひると、フランクフルトのゲッターからでたロスチャイルド一族 (Rothschild) がヨーロッパ各国の貴族にまでなつたのである。

にもかゝらず、あるひは、「だからこそ」といふべきかもしれないが、ワグナーの時代である19世紀は、反ユダヤ運動がさかんな時代だつたといへる。ゲッターから解放されたユダヤ人の成功、たとへば、ロスチャイルド

などのれいは、人々の嫉妬をかきたてることはあつても、ユダヤ人への好意とはならない。

手もとにある辞書で「ユダヤ人」(Jude)の項をひいてみると、19世紀の辞書(Sanders-Wülfing, *Handwörterbuch*)には、(2)のところに、「宗教に関係なく」とことはり、「高利がし。きたない手段で、法外な、不正直な利益をえようとするもの」とあるが、こゝろみに、現代語の辞書(Wahrig, *Deutsches Wörterbuch*)にあたつてみると、ユダヤ人の民族的、宗教的説明のみで、そこには、「高利がし」とか、「守銭奴」といふやうなコメントはついてゐない。現代でも、「ユダヤ人」が「かねにきたない人」といふ意味でつかはれるばあひが、たとへば、「白いユダヤ人」(weißer Jude)などといふことばがあるやうに、ないわけではないが、前世紀とくらべると、そのやうなつかひかたは、よりすくない、あるひは、現代はさういふのがはゞかられる時代であるが、19世紀、ワグナーのいきてゐた時代はちがふ。「かねの亡者」のいみで人々が「ユダヤ人」といふことばを頻繁につかつてゐた時代である。ワグナーはそのやうな時代の人であつた。

ワグナーのユダヤ人攻撃は、マイヤーベーアやメンデルスゾーンにたいする個人的、私的感情にもとづくともて、そのいきさつを追跡するこゝろみはおほく、まへにその一端をしめしたやうに、さぐつてみれば、それなりの理由もいくつかあげられるが、それで十分とはいへないやうである。ワグナーのたいけん、経歴から、ワグナーを反ユダヤへかりたてたものをさがすならば、あるとくいていのユダヤ人との感情的まさつといふよりも、それでもないではないであらうが、それよりもむしろ、ドレスデン暴動への参加、失敗、国外亡命のはうが、どちらかといへば、よりおほく影をおとしてゐるかもしれない。

1849ねん5月のドレスデン蜂起に、なぜ、ワグナーは味方したか。現状の社会に不満をもつてゐたからである。なぜ、不満をもつてゐたか。じぶんのオペラがみとめられず、上演を申しこんでも、大劇場からはことごとく無視されたからである。なぜ、ワグナーのオペラはみとめられないのか。芸

術が金銭の奴隷となつて、だらくしきつてゐるからである、とワーグナーは  
かんがへた。ぐわんらい、芸術とは、真情からでて、真情にうつたへるもの  
であるべきはずなのに、いまやそれが金銭に隷屬してゐる。ワーグナーは、  
ドレスデン暴動の1ねんまへの、1848ねん6ぐわつ、『共和主義の運動は王  
権にたいして、いかなる関係にあるか』といふ演説をおこなひ、そのなかで  
金権からの解放をもとめてゐる。金権は必然的にユダヤ人にむすびつき、金  
権への憎悪はユダヤ人への憎悪となる。ワーグナーは『音楽におけるユダヤ  
性』のなかで、「ユダヤ人は現に支配してゐるし、かねが権力であるかぎり  
いつまでも支配しつゞけるであらう」といひ、リストへのてがみには、「わ  
たしはまへまへからユダヤ経済をにくんでゐたのです」（1851ねん4ぐわつ  
18日）とかいてゐる。

1849から51ねんにかけて、ワーグナーは亡命地で、『芸術と革命』をはじ  
め、『音楽におけるユダヤ性』、『未来の芸術作品』、『オペラとドラマ』など、  
つぎつぎと論説を発表したが、いずれも現状の社会、あるひは、現状の芸術  
界にたいする不満をのべたものである。革命への参加、挫折、亡命といふ事  
情をかながへれば、ワーグナーの心境がおもひやられる。ワーグナーの反ユ  
ダヤがふきだしたのは、この時期だつたのである。革命挫折のたいげんと、  
ワーグナーの反ユダヤ感情とのあひだには、あるていどの相関々係がみられ  
るであらう。しかし、このばあひにも、よりおほきいのは、時代の風潮であ  
つた、とおもはれる。ワーグナーがいかに革命の敗北感にうちひしがれてゐ  
やうとも、そのとき反ユダヤ的風潮が社会ぜんたいにひろがつてゐなかつた  
ら、ワーグナーも反ユダヤには、はしらなかつたであらう。ワーグナーは  
『音楽におけるユダヤ性』の冒頭のところで、ユダヤ人にたいする反感が社  
会ぜんたいに瀰漫してゐることを、指摘してをり、『わが生涯』（1865ねん）  
では、この論説を、匿名で発表した理由についてふれ、それは個人問題とし  
てとられるのを、さけるためだつた、といつてゐる。にもかゝらず、ワー  
グナーの反ユダヤを、ワーグナーのたいげんからさぐりださうとするこゝろ  
みは、いまなほおほい。

いつたい、実証主義がさうであるやうに、ある人の思想なり、行動の根元を、個人的たいけんや経歴、環境にのみもとめるいきかたは、それでいゝのかどうか。たとへば、ある少年が犯罪をゝかしたばあひ、その少年はこれこれのわるい（個人的）環境にそだつたのが、この犯罪の遠因となつてゐる、といふやうな記事が、しばしば新聞などにでてゐるが、その少年とおなじやうな、わるい環境に生活してゐる少年たちが、おほぜいゐるのに、そのやうな犯罪をゝかしたのは、そのうちのたゞひとりである。また、（それよりも）よりよい環境の少年は、そのやうな犯罪を決してをかさないかといふと、さうではなく、よりよい環境の少年もまた、しばしばさういふ犯罪をゝかすのである。

まへにみたごとく、ヨーロッパにおけるユダヤ人排撃の歴史はながい。反ユダヤ感情はひろく社会にしみわたり、根ふかいものがあつた。このやうに、多数の人々がユダヤ人に反感をもつてゐるといふことは、その1人々々が、個人的にユダヤ人からなにか被害をうけたとか、不快なおもひをさせられたとか、さういふ体験にもとづいてゐるのではない証拠となるのではないだろうか。人々はユダヤ人からいかなる被害も蒙つてゐないにもかゝらず、ユダヤ人がきらひなのである。それは論理ではない。感情である。だから、根はふかく、矯正はむづかしい。一般大衆よりは、はるかに理性的であつたとおもはれるフィヒテでさへ、ユダヤ人と個人的つきあひはまつたくなかつたのに、ユダヤ人がきらひだつたのである。

ワグナーは、フィヒテとちがひ、おほぜいのユダヤ人と友人であつたから、ときには不快をかんだりもしたであらうが、それがワグナーの反ユダヤのおもな原因とはなつてゐないであらう。

ワグナーのいきてゐた19世紀は、あるめんからみれば、ユダヤ人解放の時代であるが、また、べつのめんからみれば、だからこそ、反ユダヤ運動のきはめてさかんな時代であつた。それまでの反ユダヤにはない人種的偏見がおこつたのも19世紀であり、ユダヤ人から評判がよかつたところのフォイヤーバハさへが、



「ユダヤ人は彼らの特性を今日に至るまで維持している。彼らの原理—彼らの神—は、世界に関する最も実践的な原理である。すなわち、彼らの原理—彼らの神—は利己主義—そしてもとより宗教の形式を取っている利己主義—である。……利己主義は人間を理論的に偏狭にする。なぜかといえば利己主義は人間を、直接に自己の福祉に関係しないあらゆるものに対して冷淡にするからである。それ故に、学問は芸術と同じように、もっぱら多神論から発生するのである」(『キリスト教の本質』, 1—12, 1841ねん, 船山信一訳)

と、いつてゐる時代、それがワーグナーの時代だつたのである。

人はだれでも、時代思潮からうける影響はおほきい。おそらくは、個人的たいけんよりも、その方がよりおほきいであらう、とおもはれる。たとへば、きはめて個人差のある書体にも、めいかくな時代の特徴がある。江戸時代の書体は、平安時代の書体とは、まったくちがふ。写本の時代決定の1つのきめては、書体である。それは個人差をこえて、じだいの特質をもつてゐるからである。1人々々のかんがへ、思想、行動もまた、それとおなじである。どんなに個性的な人の思想も、じだいの支配からぬけだしてはゐない。

## (7)

トーマス・マンによれば、ワーグナーは19世紀の時代精神のシンボルである(『ワーグナーの苦悩と偉大さ』)。ことばをかへれば、ワーグナーはそれほど時代の影響をうけた、ともいへる。ナショナリズムがさうである。1840ねんだいには、フォイヤーバハからの感化、50ねんだいには、ショーペンハウアーへの沈潜、すべてそのときどきの思想界の流行にしたがつてゐるのである。

19世紀になつてはじめてあらはれてきた人種的反ユダヤ主義のもとゝなつたところのゴビノーの『人種不平等論』、ワーグナーがこの書もつに興味をもつたのは、1881ねん2月なかばであるが、この出版から20ねんかんわすれ

られてゐた本は、そのころ急に人々の注意をひき、話題の凶書となつてゐたのである。ゴピノーとワグナーとの交渉は、たんに書もつうへだけにとどまらず、1881ねん5ぐわつ11日、ゴピノーはパイロイトにワグナーをたづね、こゝに4週かんたいざいしてゐる。さつそくワグナーは、8ぐわつ23日から9ぐわつ4日にかけて、ゴピノーの影響いちじるしいエッセー (*Heldentum und Christentum*) をかき、ドイツの困難をすくふのは、政治でもなく、法律でもなく、民族の力である、といつてゐる。ワグナーには、はやくも『音楽におけるユダヤ性』(1850ねん) で人種論の萌芽がみられるが、このあたりになつてくると、さらにゴピノーをふまへて、ワグナーとナチスはたいへんにちかい。

ワグナーのなかには、さぐれば、ナチスの原点のやうなものが、いくつかみいだせるが、ワグナーとナチスとのあひだには、やく半世紀のへだたりがある。ワグナーは直接ナチスにつゞくのでもなく、また、その時間的距離を一氣にとびこして、ナチスに直結してゐるのでもない。そのあひだには、なんにんかの間宿主ともいへる人々がある。たとへば、そのうちの最重要な1人がチェンバレンである。

フーストン・スチュアート・チェンバレン (H. S. Chamberlain) は、もともとイギリス人であつたが、ドイツの学校にまなび、哲学、音楽、美術史などをまめた。先妻と離婚のち、ワグナーの次女エーファ (Eva) と結婚してドイツに帰化し、『ワグナーの楽劇』(1892ねん) や、『リヒアルト・ワグナー』(1896ねん) などの本をかいて、歴大な『ワグナー伝』の著者グラゼナップ (Glaserapp) とともに、ワグナーの普及、宣伝につとめた。チェンバレンには、そのほかにも、ワグナーやゴピノーからの影響をうけて、『19世紀の基礎』(*Die Grundlagen des 19. Jahrhunderts*, 1899-1901) のやうな著書があり、そのなかで、ゲルマン民族の優秀さを説いてゐるので、のちには、このほんはローゼンベルクの『20世紀の神話』とならんで、ナチスの理論的支柱にもかぞへられたのである。

1923ねん5月、ヒトラーはパイロイトにワグナーの墓をまうでたをり、

ワグナー一家の居所ワーンフリートをおとづれた。そのばには、もう隠退したコージマ、当主ジークフリート、ウィニフレット夫妻、さうして、このチェンバレンも同席してをり、このときはじめてチェンバレンはヒトラーに魅了された、とつたへられてゐる。それは1923ねん11ぐわつ8日のヒトラーの最初の茶番劇、ドイツ語ではふつうプッチ（Putsch）といつてゐるやうであるが、それにさきだつこと半年であつた。

ワグナーはナチスに利用された単純な被害者ではないであらう。ワグナーには、すでにおほくのナチスの芽がふくまれてゐる。

ワグナーは反ユダヤ、それも人種的反ユダヤであつた。しかし、それは、ワグナーの「異常さ」をしめすものではなく、時代の影響をうけた結果であり、むしろ、ワグナーの「尋常さ」をものがたつてゐる。それでは、なぜ、ことさらにワグナーだけが「反ユダヤ」の烙印をおされるのか。それは、ワグナーの「偉大さ」の1つの証拠となるかもしれない。世間は、小人の「反ユダヤ」など歯牙にもかけない。ワグナーは巨人であるからこそ、ひなんされるのである。

ナチスはワグナーを偶然に発見したのではない。ワグナーとナチスとは、チェンバレンのやうな媒介者をとほして必然的につながつてゐる。さうしてまた、ワグナーはナチスにとつて、「利用」しがひがあつたのである。

をはり

## Der Antisemitismus bei Richard Wagner

Yoshihiro Ito

Es ist bekannt, daß Richard Wagner Antisemit war. Woher kam seine Abneigung gegen die Juden? Im allgemeinen wird angenommen, sie solle aus seinen persönlichen Reibereien mit einigen Semiten entstanden sein. Zwar tadelte er in seinem Aufsatz *Judentum in der Musik* die jüdischen Komponisten, vor allem Meyerbeer und dann Mendelssohn-Bartholdy. Aber er hatte zugleich gute jüdische Freunde.

Der Wagnersche Antisemitismus stammte kaum aus seinen Erlebnissen, er dürfte eher unter der Wirkung des Zeitgeistes gestanden haben. Im 19. Jahrhundert, in dem Wagner lebte, erstarkte die judenfeindliche Bewegung sehr heftig. Das Wort „Antisemitismus“ wurde neu in dieser Zeit gebildet. Damals waren viele, auch Philosophen wie Fichte und Feuerbach, antisemitisch.

Keiner, selbst ein Genie nicht, kann sich von der Stömung seines Zeitalters freihalten. Wagners Judenhaß steht, geschichtlich betrachtet, nicht isoliert, sondern er verbindet sich fest mit seiner Zeit. Wagner trägt in dieser Beziehung eines der Merkmale seines Jahrhunderts.